

ハタハタ稚魚の成長と移動

杉下 重雄（秋田県水産振興センター）

【目的】

秋田県では、開口板付き曳網によるハタハタ稚魚調査（1987年～）を実施し、稚魚の発生量を把握している。現在では水深5mから300mまで稚魚を採集できるようになった。その結果、稚魚期から未成魚期にかけての成長と移動に関する知見が得られたので報告する。

【方法】

船舶は、水深5～80mでは3.8～4.7tの民間船を、水深60～350mでは18tの第二千秋丸を使用した。漁具は底質と稚魚のサイズを考慮し、袋網目合が220、95、60径の3種類を用いた。曳網時間は10分間とし、曳網速度は民間船では1.5ktで、第二千秋丸では1.0ktとした。解析には体長、体重、入網尾数データとALC検鏡結果を用いた。また、千秋丸底びき試験操業（掛け回し式、9節）で入網したハタハタ当歳魚及び未成魚データも使用した。

【結果と考察】

成長速度は体長20～50mmと50～100mmの2期に分けられ、両時期とも成長は直線的で、かつ前者の速度の方が速かった。また、肥満度は体長40mm前後までは増加するが、その後は減少または停滞した。垂直分布は成長に伴い分布水深帯が深くなり、深所の個体の方が浅所のものより大きかった。また、水平分布は局所的で、県北部発生群はふ化後一旦南下してその後北上、北浦及び南部発生群は一旦北上してその後南下した。以上の結果から、新規加入量の推定には、6月上旬の移動経路上において、体長50mm前後のハタハタ現存量を把握することが重要であることが示唆された。